

残そう、自然の宝石箱・のりくら

# くらがね通信

No.47 (新春号)

乗鞍岳と飛騨の自然を考える会

平成 24 年 1 月 20 日発行

公開講座 新春自然談話室

入場無料

ブータンに学ぶ・・・

## ブータン王国の自然と飛騨の自然

スライド上映とお話：小野木 三郎 (副会長)

ワンチュク国王の来日で注目のブータンは、ヒマラヤの桃源郷。20世紀後半まで続いた鎖国に近い政策によって、美しい自然と伝統文化を今に残す小さな王国です。GNH 国民総幸福度を重視した国づくりで、世界から注目されています。トレッキングを通して見たブータンの自然と人々の暮らしを、ふるさと飛騨と比較して……身近な幸せとは何かについて考えてみます。

日時：1月27日(金)午後7時より 場所：高山市民文化会館

### 第12回総会・環境講演会 案内

日時：2月18日(土) 場所：高山市民文化会館

☆ 環境講演会 開場：13:30 開演：14:00

## 「里山をめぐる人と生き物の関係」

豊田市自然観察の森で取り組んでいるサシバのすめる森づくり事業の紹介、農村の過疎化による獣害、アライグマ等の外来生物対応、豊田市における過疎化対策など。

講師：大畑 孝二 氏

(日本野鳥の会チーフレンジャー・豊田市自然観察の森所長)

☆ 第12回総会 (環境講演会終了後 15:30より)

# 「山と日本人」 ―日本人はどのように山と関わってきたか―

木下 喜代男（前飛騨山岳会会長　NPO法人野あそび倶楽部理事長）  
（平成23年10月19日　自然談話室・パワーポイントでの講話要旨）

2008年飛騨山岳会が創立100周年を迎えた時に、近代登山以前の日本人と山との関わり方を調べてみた。古来日本人は自然に抱かれてその恵みで生活し、山や森に神を見、神霊・祖霊の住まう場所として崇めてきた。（アニミズム）そして現在においても霊山の寺社に参詣し、心を癒している。

## <古 代>

縄文時代は麓から山を畏敬、畏怖の念で崇めていた。山は動植物など生活の糧を与えてくれるところであり、神霊・祖霊の住处だった。山の神のおかげで生活できるとの思いが強く、住处も目立つ山が見える場所を選んだ。しかし縄文後期になると、山を仰ぎ見るだけでは物足りないということで、一部の人が祭祀の為に登っていたらしく、山頂で遺物が発見されている。（小林達雄　國學院大学名誉教授）

弥生時代になると稲作文化が伝わり、山が田に水を授けてくれる水分神<sup>みくまりのみみ</sup>信仰の対象になる。山の神を田の神として迎えるようになった。相変わらず神霊・祖霊の住处でもあった。古墳時代にかけての稲作儀礼を軸にした自然崇拜に、古墳時代後期になると大和朝廷の天孫降臨信仰が加わった。

7世紀の初め頃から私度の僧が山林修行を始め、積極的に山へ入るようになる。その後、日本古来の山岳信仰が渡来の道教（神仙思想など）・密教・儒教などの影響を受け、平安末期に至って役小角<sup>えんのおきょうじく</sup>（役行者）を開祖とする修験道という日本独特の宗教体系ができあがった。山に入って艱難辛苦し、呪力、靈験を身につけて現在から未来（死後）永劫の幸福を願うため修行を行った。山に籠もり、山に伏すことから修験者を山伏といった。彼らが金峰山や大峰山、立山、石槌山、など開山。役行者というのは伝説上の人物と言われているが、山に橋を架けたり、富士山へ飛んで行ったというような話が残っているように、非常に靈力を持った行者であったようだ。これが現在まで続いている修験道である。平安時代になると、僧侶により各地の高山（白山、男体山など）が次々と開かれる。空海や最澄が開いた高野山や比叡山等もある。

原始の山岳信仰においては山そのものがご神体であり、神奈備山<sup>かんなびやま</sup>といわれる円錐型や鋭く尖った目立つ山が信仰の対象となった。奈良の三輪山は代表例であるが、昔は神社の建物はなく、山そのものがご神体であった。奈良の大和三山（耳成山・畝傍山・天香具山）も円錐型の山。

飛騨では船山がある。久々野の堂之上遺跡<sup>どうのそら</sup>から見ると円錐型である。縄文人が崇めたと思われる。位山もそのうちの一つで、山そのものが今でも水無神社の御神体である。上野平に垣内遺跡という縄文遺跡があるが、今でも環状列石が残っている。これは笠ヶ岳からの夏至の日の出を拝むために作られたものといわれている。（飛騨考古学会吉朝則富氏）公民館のすぐ横にあり、注連縄がしてあるので機会があったら見てほしい。十二ヶ岳も古い時代から崇められて入れていた。現在は養蚕の神様が祭ってあるが、その昔は縄文人に崇められていた。下呂には矢じりなどの原料となる下呂石が出る湯ヶ峰がある。

山岳信仰の山は次の三つに分類される。①火山系＝噴火を見て、超自然的な力の存在に畏怖の念。②水分系<sup>みくまり</sup>＝水源の山に対する信仰。御嶽など農耕の水をもたらしてくれる山に感謝。③葬所系＝近くの里山で先祖を葬る山。各地の著名な山岳信仰はこのいずれかに当てはまるといわれている。

## <近 世>

近世（江戸時代あるいは安土桃山以降）になると、大門峠（長野県茅野市）や安房峠などの戦略上の峠越えが行われた。また江戸時代には諸藩が自分の領地（山林）の境界の巡視で山へ入った。

(黒部奥山回りなど)幕府の命令で本草学者が薬草採集のため各地の山に登った。またロシア船が日本周辺に出没する時代になると、間宮林蔵や最上徳内らによって北辺の探検や測量が行われる。松浦武四郎の著名山の登山。

江戸後期になると、文人墨客が旅の延長での山登りそのものを楽しむようになった。橘南谿<sup>たちばなけんげい</sup>は飛騨へも旅してきており、双六谷の手記を残している。大淀三千風<sup>おおよどみちかぜ</sup>は全国各地の山を登って紀行文を残している。池大雅<sup>いけのたいが</sup>も白山や富士山に上っている。この趣味での登山は、日本における近代登山の先駆けといわれる。

一方では一般大衆が富士山や御嶽山、出羽三山などへ講を組んで団体登拝に行き出した。富士講では、江戸八百八町に八百八講あったというくらい講が盛んで、町の中に富士山形の小さな山を作り拝んだ。

## <近代>

明治の開国と共にお雇い外国人が入ってくると、彼らは祖国で登ったやり方で日本の山を登り始め、日本に近代登山の思想、用具をもたらした。(ナウマン、アトキンソン、ガウランド等)彼らが帰った後、一足遅れてウェストンが来日。彼は宣教師でありながら殆ど山ばかり登っていた気がする。

その間に陸地測量部による測量登山が行われた。「剣岳・点の記」でもおなじみの柴崎という測量官が剣岳に登るなど、全国の主要な山は彼らの測量登山によって初登頂されている。この点がヨーロッパと違う点である。膨大な器材を運び上げて大変な作業であった。そのあとウェストンのすすめで日本山岳会が設立されて小島鳥水<sup>うすい</sup>が初代会長となり、一般にも登山が盛んになってきた。

山岳を崇めるといのは日本だけでなく、世界各地で行われていた。ギリシャのオリンポス、モーゼが十戒を授かったシナイ山、インドのメルー山、チベットのカイラスなど。ヨーロッパではキリスト教という一神教になってから「自然は人間に従属すべき」という考えになり、「山は悪魔の住処」と捉えられていた。ルネサンスの頃に科学的な観察のために山へ行き出し、産業革命で富と時間を有したイギリス人がアルプスの雪と岩の高峰に挑戦する楽しみを見つけたのが近代登山のはじまり。未知と困難を求めるロマンティシズムから出発し、初登頂、初登攀が最高の荣誉とされた。キリスト教の自然観から、山の征服という面が強くなった。

日本に本格的なアルピニズム(近代登山)が入ってきたのは、大正10年に槇有恒がアイガーに初登攀して帰国してから。槇の薫陶で学生が中心になって冬山登山、岩登り盛んになった。これはスポーツ的要素の強い登山であった。日本へ入ったアルピニズムは、ヨーロッパとの山容の違い、歴史的な自然観の違いから、雪と岩だけを登る派と一線を画し、森や溪谷を活動の舞台とする静観派も生まれ、現在に至る。

日本山岳会は飛騨山岳会創立の3年前の明治38年に創立されたが、もともと植物学者の集まりであり、会の生い立ちが純粹でない部分もある。飛騨山岳会は「山に登ろう」と言う、明確な目的を持って出来た会であり、飛騨人として自慢してもいいと思っている。設立当初の会員は学校の先生が多かった。

飛騨山岳会創立100周年の時に大川家(高山市下林の旧家)から発見された明治42年の白山登山の写真を見ると、脚絆にワラジ履きである。近代登山とは程遠い格好だ。軍服



明治42年飛騨山岳会員の白山登山(大川家所蔵)

の人もいるが殆どが着物姿である。この時三角測量したばかりの櫓が頂上に立っている。大正期になって乗鞍登山を行っている写真の格好も相変わらず金剛杖にワラジ履きである。しかし飛騨人は「新しい物好き」で、昭和初めの乗鞍岳登山の写真を見ると、もうアイゼン・ピッケル・ザイルを持ち、洋服を着ている。大正末期、飛騨でも「飛騨」と銘が入った立派なピッケルが作られている。(代情家所有で山岳資料館に展示) これは全国的に有名になり、ピッケルの研究者から問い合わせが来た。どこで作ったのか不明であるが、ピッケルは現在と同様の氷に打ち込んだ時に抜けないような刻みが考案されている。飛騨には全国的にも早い時期にスキーが伝わり、乗鞍岳でスキー登山が盛んに行われた。



昭和初期の乗鞍岳積雪期登山 (朝戸家所蔵)

### <現 代>

1980年代に世界各地の主要な高峰が登られてしまい、純粋なアルピニズムは一応終焉を告げたとされている。現代の日本における登山は、アルピニズム的登山(道具と技術を使って楽しむスポーツ的な登山)、中高年・山ガールなどの登山(主に自然を愛でる登山)、宗教登山など多様化している。そのうち中高年や山ガールなどの登山は、装備、服装などは一見アルピニズム的だが、実は江戸期の文人墨客の山遊びや講登山の系譜であり、アルピニズムとは無縁である。しかし、いまやアルピニズム的登山だけが優れているという時代でなくなり、低山ハイキングや百名山めぐりなどの自然を愛でる中高年登山もそれなりに価値がある登り方で、優劣はない。

アルピニズム的登山と中高年登山の違いは、山小屋に泊まるかどうかでも違うといえる。本来はテントに泊まって山に直に触れ、より味わうのが望ましいが、なかなか難しいであろう。ただ、現在の山小屋はあまりにも便利になりすぎてしまった。これは登山者側が山小屋でごちそうを食べたい、テレビが無いなど無理難題を言うこともある。ある山小屋では天ぷらを揚げて油を谷に流すという事が出てきて、自然破壊が起きていると聞く。寝具や食料を持参した昔の山小屋には戻れとは言わないが、山へは不便を楽しみに行くようにし、山へ行ったときくらいは粗食でいいのではないか。

それと気になることは、自然を楽しむのはいいが、近年自然への畏敬の念がなくなっていることだ。山からの恩恵に感謝することを忘れてはならないと思う。今は山、自然に対してエゴ的になっているような気がする。太古から我々に刷り込まれた「自然を畏敬し、畏怖する念」を今一度思い起こす必要があるのではないか。それも今後の課題であると思う。



昭和初期の乗鞍岳積雪期登山 (朝戸家所蔵)



昭和9年の乗鞍岳スキー登山 (朝戸家所蔵)

# 「生物多様性ひだたかやま戦略」を考える

副会長 小野木 三郎

国家戦略を受けて岐阜県版が目下作成中ですが、高山市は全国に先がけ、地方自治体としては4番目の速さで決定済みで、基本構想編に続く「実施行動計画編」も決定しています。しかし、マラソンや400mリレーが如き陸上競技ではありませんから、速さよりもその中身こそが重要ですが、市民の間にその実体が伝わっているでしょうか。

基本施策として、**1. 生態系の保全・再生 2. 野生生物の保護・管理 3. 生物多様性のめぐみの利用・伝承 4. 生物多様性のめぐみの新たな利用 5. 生物多様性の普及啓発 6. 生物多様性の教育の推進** の6項目毎に、基本構想が述べられている。

少し長くなりますが、**1. 生態系の保全・再生**について要約して記述してみると、

**(1)生態系ネットワークの形成の推進** 生物の生息・生育空間には、バッファゾーンとコアゾーンをふまえ「緑の回廊」が必要。コリドー(回廊)を確保し、生態系ネットワークの形成を推進します。

**(2)重要地域の保全** 飛騨地方を特徴付ける生態系や、多様な生物が生息・生育している場を適切に保全する必要がある。各種法令によって保全されている地域でもあるが、生物多様性保全の観点から十分でない面もある。重要な役割をもつ地域の保全を図る。

以下、**(3)自然再生の推進 (4)農林水産業の推進 (5)森林の保全 (6)田園・里地里山の保全 (7)市街地の生態系の保全 (8)河川・湿地の保全** など全部で8項目にわたって詳述されています。**2～6** についても同様( )項目について詳述されています。

基本構想編づくりに際し、意見聴取を受けた際、私が強力に申し伝えたのは「これでは全く具体策に欠け、せつかくの戦略が、お題目並べのお経に過ぎず、空念仏に終わるのではないか。」でした。当時の担当者の説明では、『これを受けて次年度には「実施行動計画」を作ります。それこそが戦略の具体策ですから・・・』とのことでした。サテ、サテ、期待していた「実施行動計画編」を見て私は、ガックリ、ビックリ仰天でした。ぜひ皆さん一人ひとりが、「基本構想編」「実施行動計画編」を手にされて読み比べてみてください。

全項目を検討記述したら、単行本一冊以上にもなりますので、先述の**1. (1)生態系ネットワーク形成の推進**の実施行動計画を要約ではなく全文を挙げます。

## 【主要施策】

多様な生物種に応じ、その生物がふだん利用している核となる区域(コアエリア)、その周囲にあって外の世界の影響を緩和する地域(バッファゾーン) それらを有機的に連結する行き来するための回廊(コリドー)のまとまりを確保し、生態系ネットワークの形成を図ります。

## 【施策にもとづく主な取り組み】

>各地域における生物の生育・生息域の調査の実施

>生物種に応じた生態系ネットワーク(エコロジカルネットワーク)の形成の検討。

以上ですが、いかがでしょうか。これでは基本構想の文章を再記し、多少箇条書きにただけで、何を、誰が、何時までに、どのように行なうか……といった行動計画の視点が全く見られません。

すでに全国的には、林野庁が、生物多様性保全の必要性から、「緑の回廊」を設定しています。これは国有林内のことですが、東北地方の山域では、広く線状に連なって設定されています。ところが生物多様性の屋台骨ともいえる日本の屋根、飛騨山脈一帯は欠けています。ならば国(林野庁)に働きかけて、日本列島全体の視野の中で、東北から関東、中部地方と実りある緑の回廊の追加設

定を挙げるなどこそが、具体的な実施行動計画となるはずですが。このたった一つの事例でも明らかのように、具体策に欠けた「実施行動計画編」が冊子に印刷され発行されただけでは、なんら新しい事業も生まれず、旧態のままの自然環境保全行政に終始するのではないかと心配しています。國島市長さんは、口ぐせのように「主人公は市民です」と云われています。そうです、今、全国各地で市民版地域戦略づくりが始動しています。本会が中核となって、生物多様性ひだたかやま戦略、「実施行動計画編」の精読・検討・学習会を開催し、達成目標が具体的でなく理念だけのものから脱皮し、地域の自然を守る道が明らかに見える「市民版地域戦略」をつくろうではありませんか。

※「生物多様性ひだたかやま戦略」（基本構想編）（実施行動計画編）は高山市のホームページでも公開されています。ホームページでは策定にあたり行なった「市民アンケートの結果」、「生物多様性保全の小中学生向け冊子」も掲載してあります。是非読んで見て下さい。

<http://www.city.takayama.lg.jp/chiikiseisaku/tayousei.html>

## 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会の歩み・3

《講師の肩書きは当時》

### 平成15年（2004年）

- 1月20日 「くらがね通信・No11」発行
- 3月21日 第3回総会（高山市民文化会館）
  - ・特別講演 「メディアが壊す百名山」
  - 講師：加藤久晴氏（東海大学メディア学科教授）
- 4月20日 「くらがね通信・No12」発行
- 5月13日 公開講座『乗鞍の自然談話室』を始める（高山市民文化会館）
  - 「花ってどんなもの、こんなに面白いもの」
  - 小野木三郎（飛騨高山ふるさと歩こう会代表）
- 5月15日 乗鞍スカイライン開通（この年からマイカー規制実施）
- 6月 8日 サマースキー実態調査・アンケート調査（乗鞍岳）
- 6月10日 公開講座・「山の鳥を楽しむ」 直井清正（日本野鳥の会飛騨ブロック代表）
- 7月 8日 公開講座・「夏山を楽しむ」 木下喜代男（飛騨山岳会会長）

### 会員状況

平成23年12月末会員数 一般 100名、団体 5団体

- |               |  |
|---------------|--|
| ■ 会員を募集しています！ | 年会費 = 個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円 |
| あなたの知人、友人に    | ・ 郵便振替 00800-8-129365                  |
| 入会をおすすめください   | ・ 振込先 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会                   |

くらがね通信 第47号（新春号） 平成24年1月20日発行

発行者 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町4-218-3 飯田 洋  
TEL 0577-32-7206 ・ FAX 0577-32-7207

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

- 編集責任者：宝田 延彦 E-mail: nobu1995@peach.ocn.ne.jp TEL(FAX 兼) 0577-34-1287
- 編集者：住 寿美子 TEL 0577-34-7237

表紙写真提供：小池 潜

印刷：アドプリンター